

「被りもの」の教材開発② – 紙袋を使った動物の被りもの –

辻 野 栄 一 *

Development of teaching materials for “headgear”②

– Animal headgear made from paper bags –

TSUJINO Eiichi

要約

2021 年度から著者が保育学科で担当する授業の中に「子どもと造形表現Ⅱ」がある。その授業課題の 1 つとして「被りもの」の製作を取り入れている。この課題は、2021 年から 2024 年までその内容を改良しながら授業展開してきた。本稿は、著者が開発した一連の教材「被りもの」の第 2 弾として、2021 年に取り組んだ「段ボールを使った動物の被りもの」(本学の紀要第 82 号に研究ノートとして掲載)での考察をもとに、2022 年には素材等を改善して「紙袋を使った動物の被りもの」という課題で教材開発を行った成果の報告である。試作を重ねて教材開発を行った過程を振り返り、その教材を使用して授業展開した内容や手法について報告、考察し、今後の方向性についてまとめている。

キーワード：幼児教育、造形表現、演習、被りもの

Abstract

Since 2021, the author has taught a class called "Children and Creative Expression II" in the Department of Childcare. One of the class assignments involves students making "headgear". This assignment has been developed and refined in the classroom from 2021 until 2024. This paper is the second in the "headgear" assignment series for which teaching materials were developed. Based on the consideration of "Animal headgear made from cardboard" (submitted as a research note in the university's Bulletin No. 82) published in 2021, this article reports on the results of the development of teaching materials, improving upon the materials and methods from the 2022 assignment, i. e., animal headgear made from paper bags. This paper reflects on the process of developing teaching materials through repeated prototyping, reports on and considers the content and methods used in the class, and outlines future directions.

Keywords: preschool education, formative expression, exercises, headgear

受理年月日：2025 年 7 月 31 日 *高松短期大学保育学科教授

1. はじめに

本学保育学科には、保育者としての資質能力の一つである子どもの造形表現に関わる専門的知識と思考力・技能を習得するための授業「子どもと造形表現Ⅰ」及び「子どもと造形表現Ⅱ」がある。表現力や色彩感覚、立体造形感覚等を身につけることを目的としている。著者は現在、1年生を対象に前期に「子どもと造形表現Ⅰ」、後期に「子どもと造形表現Ⅱ」を担当している。「子どもと造形表現Ⅱ」の授業では、大別して7つの課題に取り組み、製作を行っている。その1つに「被りもの」の課題がある。

この「被りもの」の課題は、2021年から2024年まで内容を改善しながら展開してきた。2021年、最初に手掛けた段ボールを使った「被りもの」の課題については、素晴らしい作品が多数生まれ、良い結果を残せた。その教材開発内容については、研究ノート「段ボールを使った動物の被りもの」として、本学の研究紀要第82号に投稿しているので（以下にその課題について述べる際は「段ボールの被りもの」と記載）、詳しい内容については、その論文を一読願いたい。

しかし、大きく改善すべき点も見つかった。その反省点を踏まえた考察をもとに、研究の第2弾として2022年には素材等を変更して「紙袋を使った動物の被りもの」という課題で教材開発を行い授業展開した報告である。

2. 「子どもと造形表現Ⅱ」について

「子どもと造形表現Ⅱ」の授業では、モダンテクニックと呼ばれる絵具やクレヨン等を使った画材の特色や色の変化を味わう課題や画用紙、段ボール、紙粘土、木材等の素材を活用して製作する造形的な課題を取り入れている。

モダンテクニックの中には、作者が意図せず偶然にできた色や形を楽しむ表現技法が多くある。また、作者の感覚で色を置いていく本能のようなものや一瞬のひらめきが大きく影響する場合もある。確かに、このような感覚的な活動も必要であるが、段取りを踏まえて計画的にコツコツとこだわりを持って積み上げていくような造形課題も重要と考える。そのようなものづくりは、造形力を養い、素材特性の知識を得て、計画性や根気強さ、集中力を養うことができる。その要素を取り入れた造形活動として、「被りもの」の課題等を取り入れている。

そして、この授業では、到達目標として以下のことを掲げている。

①造形表現の発展的な知識と技能を身につけることができる。②素材や画材の特性を知り、色彩感覚や立体感覚を身につけることができる。③独創的で工夫した技術や表現などを発展させることができる。④造形教材の準備や子どもが表現するプロセスを理解し、造形教育を計画することができる。

3. 「被りもの」について

幼稚園や保育園等でよく使われる課題の一つに「被りもの」がある。代表的な「被りもの」

の製作課題として作られるのが、2月3日の節分にちなんだ「鬼の被りもの」であろう。書籍等でも幼児教材事例として紙皿を使った鬼のお面やヘアーバンド型の製作例が紹介されている。何と言っても子どもの変身願望の欲求を満たす魅力的な課題の一つである。富田（2022）によれば、子どもに限らず、人は誰しも今の自分とは異なる誰かになってより楽しく素敵な人生を疑似体験してみたいという願いを持っている。空想-人型キャラクターへの強い憧れやアイテムへの信頼は、子どもなりの変身願望を表すものであると言えよう。^{〔1〕}と論じている。「被りもの」の種類は、お面型、帽子型、頭からすっぽりと覆う覆面型等がある。

4. 教材開発後に授業展開した「段ボールを使った動物の被りもの」（2021 年）について

4-1 概要

2021 年「子どもと造形表現Ⅱ」の授業課題のために、段ボールを用いた「被りもの」を課題に取り入れて教材開発を行った。造形性を重視し、「被りもの」をテーマに、段ボール箱の直方体の形をそのまま使ったようなロボットやメカニカルなものではなく、動物に限定した。素材となる段ボールは、A1 サイズで厚さ 1.5 mm の極薄段ボール 1 枚とした。大きな平面の段ボールから、いきなり「被りもの」の造形物を作るのは大変困難であるため、代表的な動物の形の基本形を 2 種類用意した。まずは基本形を作りその後、自分の好きな形に改良する方法を取った。

基本形となる 2 種類は、馬型とライオン型とし、学生にどちらかを選ばせた。次に選んだ動物の型紙を配布し、それぞれ極薄段ボールに写し取らせ、そのパーツを切り抜き、基本形を組み立てた。基本形ができてから各々の学生が、形を改良したり、彩色したり、違う素材を貼り合わせたりして、自分好みの動物に形を改良して仕上げていくという展開である。

課題によっては、幼児教育の課題だから、5 歳児レベルの完成度で良いだろうという安易な考えで、こだわりを持たず完成させることだけを目的に製作する学生がいる。しかし、この課題では、保育者を目指す短期大学生として、各種素材の特徴や扱い方を知り、造形力の向上と完成度の高い作品製作をめざすよう指導した。

4-2 2021 年の段ボール素材を使った「被りもの」課題の結果及び考察

2021 年に行った「段ボールの被りもの」の課題では、造形性の高い細部にもこだわった「被りもの」の作品ができたため、この課題には評価できる要素が多数あると考えた。用意したライオン型と馬型の 2 種類の基本形から、各々の学生がどちらかのタイプを選び、そこから創意工夫をしていろいろな動物に形を変えていった。時には資料となる動物の画像と見比べながら解体と構築を繰り返す学生もいた。土台として使用した段ボール素材の良かった点としては、使用した厚さ 1.5 mm という極薄段ボールが軽量で加工がしやすく、多面体を構成する面材として十分な強度があるという点であった。そのため、多様な動物に変化

させることができた。

しかしながら、1 番大きな問題点は、馬型、ライオン型の基本形の製作に大変時間がかかった学生が多くいたことである。型紙を段ボールに写し取る。段ボールをカッターで切断する。折り曲げ線である点線部分を折り曲げる。のりしろ部分を接着しながら組み立てるという製作工程の時間である。著者が想定していた時間配分では、最初の授業（90 分）で大半の学生が基本形を完成させられると考えていたが、完成できない学生が多くいた。

ものづくりが好きで造形の経験がある学生は、1 時間足らずで基本形を完成することができた。しかし、大半の学生は、2 回の授業（計 3 時間）で完成した。これまで造形活動を行う経験がほぼなかったと思われる学生は、2 回の授業（3 時間）でも完成することができず、3 回の授業を費やして、ようやく完成した学生もいた。「段ボールの被りもの」の課題として 4 回の授業での完成を目標としていたが、大幅な作業遅延となった。

時間がかかった要因として、イラストボードで作った型紙を全員分用意できなかったことが挙げられる。また、段ボールという素材を加工する際に、学生はカッターを使って切断したが、カッターの使用経験が少ない学生は、カッター刃を立てて深く差し込み、一度で切り落とそうとするため、段ボールに刃が引っ掛かり、紙が寄れてスムーズな断面にならず、ガタガタの断面を修正するために時間もかかったのである。そのような学生が何人もいた。

以上のことから、次年度の授業課題で「被りもの」を取り入れて授業展開するにあたり、基本型の製作時間の短縮が必須条件となった。そこで極薄段ボールの素材自体を諦め、他の素材を使用して授業展開することを検討した。

5. 2022 年「被りもの」の学生に対する製作条件と教材開発での設定条件

2022 年の「被りもの」課題を学生が製作する際の条件は、下記のように前回の「段ボールの被りもの」と同様とした。

①頭からすっぽり被る覆面型とする。②動物を製作テーマとする。③ゼロから形を造るのではなく、基本形をまず造り、そこから自由に形をアレンジして自分なりの動物に改良していく方法を取る。④基本形は、馬型、ライオン型の 2 種とする。

また、教材開発をする上で、前回の「段ボールの被りもの」の考察から必須条件であった基本型製作の時間短縮を目指し、短時間でスムーズな授業展開ができるようにするには、以下のような開発条件が必要であると考えた。

①切ったり貼ったりする加工が容易である。②可能な限り少量の材料で成形できるものとする。③できるだけパーツを少なくし、誰でも短時間で簡単に基本形の加工・組み立てができる。④基本形から自由に改造したり、他の素材を接合したりといろいろな動物に変化させることができる。

6. 試作

上記 5 の教材開発条件を考慮し、2022 年度「被りもの」課題の開発を行うこととした。

6-1 素材について

保育現場の幼児造形表現で使用する素材としては、やはり身近にある紙が圧倒的に多く使われている。幼児自ら手で紙を破ったりハサミで切ったり、折り曲げたりと加工が容易である。また、折り紙や色画用紙で色が豊富である。絵具やクレヨンで色を塗ることもでき、日常で使われている素材である。

市場調査をする中で、あるメーカーのサイトを見つけた。そのメーカーでは、馬やライオン等、数種類の動物の「被りもの」図面が無料でダウンロードができ、プリンターで印刷して、線に従って切ったり、のりしろ部分を貼ったりすることで紙の「被りもの」ができる仕組みとなっていた。

紙の素材の検討で、一番初めに考えたのが包装材料の紙袋である。紙袋は、保育現場で節分の際に鬼の「被りもの」の材料として良く使われる（図1）。そして既に直方体に加工されていることから、製作時間短縮になると考えたからである。また、折り紙のような薄い紙ではなく、紙袋としてある程度の強度のある紙を使用しているため破れにくい点が特徴である。実際に著者が前回の「段ボールの被りもの」の試作をする際、最初に紙袋を



図1 紙袋を使った事例

使ってモデルを作った。直方体という形状であり造形のイメージを展開しやすい材料であったからである。そのことを踏まえて、紙袋を使用した「被りもの」開発を進めることとした。ただし紙袋は、単に直方体をそのまま利用するのではなく、形を変化させてより造形性の高い「被りもの」となるよう検討を進めた。

6-2 使用する紙袋について

市販されている紙袋の市場調査にあたり、パッケージを専門とする販売店に足を運び、安価で絵具等で色を塗ることも想定して白い無地の紙袋を調べた。成人の学生が被れる最適な大きさの紙袋を何種類か探し出した。

市販の紙袋の中で、十分な幅や高さがあり絵具を使って色を塗ることができる白色の紙袋で、縦42×横32×幅11cm（手提げ紐の部分を除く）の大きさの「白地手提袋」を見つけた。紙の素材としてもある程度の厚みもあり強度は十分であるため、使用を決定した。



また、前回の「段ボールの被りもの」で使用したA1段ボールの大きさでは、馬型基本形の首の長さまでを確保することができなかったが、この大きさの紙袋であれば、縦が42cmあることから、十分な馬の首の長さを表現できると考え選択した。そして、この紙袋1袋のみを使ってできることを基本形製作の開発条件に加えた。

図2 白地手提袋

6-3 試作 1・馬型

形状が単純な馬型の試作から取り掛かった。以前作った試作品を取り出し、それを参考にしながら、より形状が豊かで、切ったり貼ったりする箇所が少ない形を検討していった。

形のブラッシュアップを重ねる中で、前回の段ボール馬型では、頬骨の膨らみを表現していたが、より複雑になってパーツが増えるために断念した。横顔の輪郭重視の平面的な馬型となったが、1枚の袋を切ったり貼ったりして単体のパーツを切り離して使うことなく馬型の形ができる方向性が見えた（図3）。



図3 馬型の試作（紙袋）

6-4 試作 2・ライオン型

馬型同様に前回の試作品を取り出し、参考にしながら改良を繰り返した。馬型は、横から見た際のシルエットで、ある程度馬を連想させることができたが、ライオンの場合は丸顔で、特徴となる頬骨の膨らみを表現したいため非常に複雑になった。

馬型同様に単体で成形できることを考えていったが、膨らみを表現するのは困難であったため、結果的に本体と2枚のパーツとなった。紙袋の余白部分を使用して、左右の頬骨部分を別パーツとして作り、切り貼りすることにした（図4）。

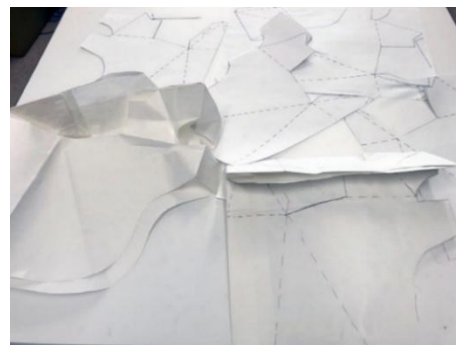


図4 ライオン型の試作（紙袋）

6-5 試作 3・型紙製作

学生に配布するための型紙の製作である。使用する「白地手提袋」の最も広い面（42cm×32cm）は、A3サイズ（42cm×29.7cm）とほぼ同じ大きさであるため、A3サイズのコピー紙に型紙としてプリントすることができる。よって、全員の学生にそれぞれ型紙コピーを配布し、転写させることで時間短縮に繋がると考えた。

A3サイズ型紙の中で、より単純で効率良く、パーツの少ない形で、美しい馬型・ライオン型を目指し、ブラッシュアップしていった。できた型紙が以下の図5、図6である。どちらも左側が型紙で、右側が型紙を鉛筆でなぞって描いた紙袋である。

馬型の型紙コピーは、空きスペースに馬上面の型も描き、A3サイズの用紙1枚で収められた。しかしライオン型は、できるだけ単純な形を心掛けたが、頬骨部分の膨らみを表現するために、馬型よりも形状が複雑になった。よって単体パーツが増え、それを空きスペースに描いた。それだけではA3サイズの用紙に入りきらず、ライオン上面の型は別紙（A4サイズ）に描き、1枚増えることになった。

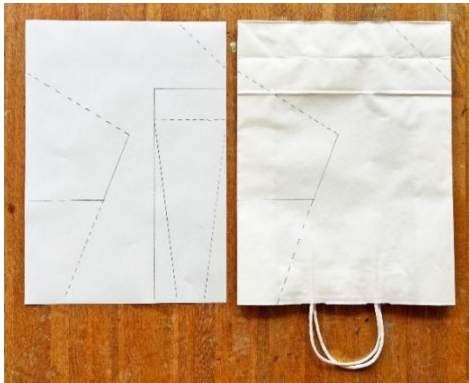


図5 馬型の型紙と転写した紙袋



図6 ライオン型の型紙と転写した紙袋

6-6 完成した基本形

できるだけ製作時間を短縮し、単純な形でパーツが少なく美しい形を目指した結果、図7、図8が完成した2種類の基本形である。



図7 馬型の基本形



図8 ライオン型の基本形

7. 授業展開

「子どもと造形表現Ⅱ」の授業は、AクラスとBクラスに分かれており、それぞれ同じ授業を行っている。馬型とライオン型の2種類の型を用意する中で、前回の「段ボールの被りもの」では、どちらの型を作るかを学生に選択させた。しかし、紙袋の課題では、製作工程の説明時間をできるだけ短縮するために、Aクラスは馬型、Bクラスはライオン型に限定して作らせることとした。

「紙袋の被りもの」課題を開始する授業の1週間前に課題説明をした。Aクラスは馬型から、Bクラスはライオン型から各々の学生がどのような動物に変化させるかを検討し、その動物の写真等の資料を持って来ることを学生たちに伝えた。

7-1 製作工程 概要

授業は、毎週 1 回の授業（90 分）の中で、4 回分を使って完成させる計画を立てた。以下のような製作工程で授業を進めた。

①馬型またはライオン型の型紙（A3 コピー紙）を紙袋の上に置き、型紙をなぞって紙袋に写し取る。点線の折れ線部分も正確に書き込む。②写し取った型をハサミで切り抜く。③切り取った紙袋を折り曲げ、のりを使って接着しながら組み立てて、基本形の完成となる。④自分の作りたい動物にするために鼻やあご等の形を改造したり、耳、角、目等のパーツを取り付けたりする。⑤色塗りや他の素材を貼り付ける等の装飾を施して完成させる。

7-2 授業 1 日目 型紙から写し取りと切断

前述のように時間短縮のために型を限定して、A クラスは馬型を、B クラスはライオン型で基本形製作を進めた。各クラスで基本形の加工・組み立てについて全員に説明をしながら進めていった。

①紙袋とそれぞれの型紙（コピー紙）をそれぞれ配り、まずその型紙をハサミで切り取らせる。図 9 は、左側が馬型、右側がライオン型である。図で分かるようにライオン型の形状が複雑でパーツが多くなった。

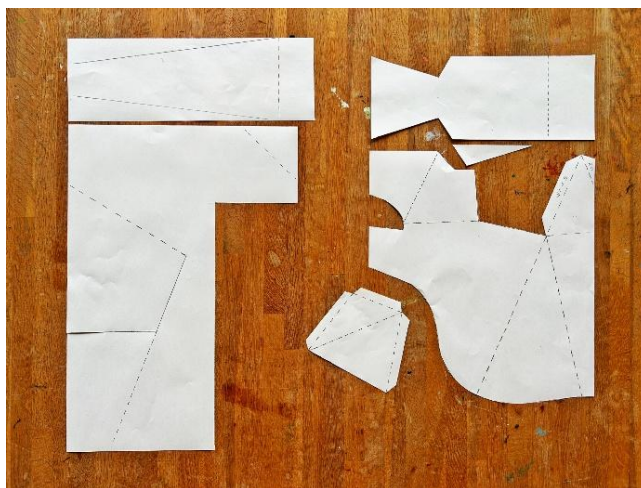


図 9 型紙の切断

②紙袋の手提げ紐は必要がないので最初に切断させた。

③紙袋の広い面に型紙を上置いて、外周部分の端を鉛筆でなぞっていった転写していく。切断する部分は実線で、折り曲げる部分は点線で描かせた。

④紙袋に型紙を転写し終わった学生から、それぞれハサミを使って紙袋を切り抜く作業に取り掛かった（図 10）。馬型に関しては、紙袋の横幅（32cm）からより細長い馬面にするために、紙袋の底部分と側面部を伸ばし、紙袋の横幅よりも 5.5 cm 延長した形を作った。



図 10 紙袋の切り抜き作業

全体として馬型の A クラスは全員基本形が完成した。馬型よりも形状が複雑なライオン型の部クラスは、1 割程度の学生が完成することができなかった。未完成の学生は、空き時

間を利用して完成させるよう指示をした。また、それぞれの学生が何の動物にするかを決定し、次週までに資料を準備させた。

7-3 授業2日目 基本形からの改良

基本形が完成後、ここからが本来の学生の創造性や造形性を発揮する時間である。また、紙以外の素材を扱う展開となり、準備や計画性も必要となる。

最初に全学生に向けて、それぞれの学生が選んだ動物の画像等と見比べて、顔の形や目、耳、角の形、付いている位置の違いを確認させた。次に、本体の改造の仕方を説明した。また、ボール紙を各学生に配布して、ボール紙を使った耳や角等の形の作り方、そして取り付け方を説明した。

その後、各々の学生は鼻の形を変更や、耳や角等の付属品の取り付けをして改造を行った。仕上げ作業で他の素材を表面に貼り付ける予定の学生は、セロファンテープ等の使用を許可した。



図 11 基本形からの改造

7-4 授業3・4日目 装飾

作業が大幅に遅れている学生が一部いたが、パーツの取り付けや改造がほぼ完成し、いよいよ色塗りや装飾である。ここからは、それぞれの学生が準備した画材や材料を使って、よりその動物に近づけるように色や質感を工夫して塗ったり貼り付けたりしていく。その動物らしさが出るように質感を重視して、綿や毛糸・フェルト等を用意している学生もいた。動物の表現は、目の製作も大変重要なポイントとなる。色や素材を塗ったり貼り付けたり、細かな仕上げをして完成となった。仕上げ作業では、学生の個人差が目立った。学生によっては、別の素材を緻密に張り付けて、手間がかかり時間を要する作業で授業内では完成できず、宿題となった学生もいた。

8. 学生の成果物

各々の学生が基本形から違う動物に改造させていった完成作品を紹介したい。絵具で色を塗る行為を行った学生は少数で、フリース素材、毛糸等を使った学生が多かった。馬型を使って製作した学生では、キリン（図 12）、ペガサス（図 13）、羊（図 14、図 15）、角や耳を取り付けてそれぞれの特徴ある動物に変化させた。図 12、図 13 はどちらも基本形をそのままを使用しているが、キリンは色画用紙を切り貼りして完成度の高い作品となっている。ペガサスは、円錐形の角やたてがみにこだわりを持って作っていたが、製作時間がかかり、目やその他の表現まで行きつけなかったのが残念な点である。



図 12 作品①



図 13 作品②

続いて、図 14、図 15 は、どちらも羊という同じテーマであるが、基本形の馬型の細長い鼻を短く太くして改良している。また、参考とした羊の画像を見ると、顔の部分は毛が短く、首の部分とは生えている毛の長さが違うことに気付き、羊毛が長くふわふわした部分には毛糸や綿を、毛の短い部分はフェルトを使い分ける。どちらも表現豊かな完成度の高い作品である。



図 14 作品③



図 15 作品④

次にライオン型を使った作品を紹介する。図 16 は、基本形の鼻を短くして、大きな耳を取り付け、凹凸のある布を巻きつけて、みごとにコアラに変身させた。布のしわが気になるが、基本形が何か分からないくらい大胆な発想と改造で形を作ったことで大変魅力的な作品となっている。図 17 は、ライオン型をそのまま使用しているが、紙袋自体にアクリル絵の具で着色し、フェルトで模様を張り付けてヒョウを表現した作品である。ほとんどの学生が布やフェルトを張り付けて表面を覆っていたが、絵具を使って着色した数少ない作品例である。



図 16 作品⑤



図 17 作品⑥

図 18、図 19 もライオン型そのままを使った作品ではあるが、図 18 は、毛並みを表す布を貼り付け、図 19 は、毛糸を 1 本 1 本 2cm 程に短く切って、それをボンドで土台に接着した根気と手間のかかる完成度の高い作品である。耳はあえて切れ込みを入れたこだわりがある。



図 18 作品⑦



図 19 作品⑧

9. 結果及び考察

本稿は、前年に授業で行った「段ボールの被りもの」の反省点から、大半の学生が授業時間内に作品を完成することを目指し、素材を変え方法を修正して臨んだ造形活動研究であった。4 回の授業で 9 割以上の学生が作品完成にこぎ着けた。結果として、2 種類の基本形からアレンジした造形作品は、完成度の高い作品が作られた。

今回の「紙袋を使った動物の被りもの」製作について、結果及び考察として、課題の長所・短所について述べたい。

まず、長所としては、①素材を紙袋に変えて成形したことによって、基本形が短時間で成形できた。紙袋という直方体の形を利用することによって基本形の成形が容易となったこと、A3 サイズの型紙を全員に配布することで全員が一齐に写し取ることができたこと、クラス全員が同じ型のため、作り方の説明がスムーズに行えたことが、基本形製作にかかる時

間を大幅に改善できた要因であると考え。②紙袋の素材を使うことで、カッターを使わずハサミで切ることができ加工がしやすい。よってこの素材は、保育現場でも使用することができる。③段ボールには劣るが、紙袋の素材は、軽量で比較的頑丈であり、耳や角を取り付ける土台として十分な強度の素材である。④基本形を成形することや基本形から変形させて別の動物に作り変えること、目、耳、角等を作って取り付けることで造形能力を養うことができる。⑤白地手提げ袋は、表面の装飾として、絵具やクレヨン等による彩色、フェルトや毛糸等の違う素材の接着が可能であり、豊富な色の配色や素材の特徴を知ることができる。⑥テーマを動物としたため、2種類の基本形から、改造したい動物に変化させるために、学生各々が、動物の写真等をしっかり観察して、鼻や耳の形やつき方や自然が創り出した形、模様の美しさを知ることができる。⑥材料費として、極薄段ボールに比べて紙袋の方が安価である。

短所は、できた作品の動物のバリエーションが、前年度に比べて少なかったことである。同じ種類の動物や同じ素材を使った作品が多数見られた。基本形から各学生が改造することによって、別の動物の形に変化させることが目標であったが、基本形をそのまま使い、目、耳、角等を取り付けて終了という安易さに走る学生が多くいたように感じた。残念なことである。前年度は、何人かのこだわりを持った学生が、魅力ある作品製作をしていたことに引きずられて、周りの学生に良い影響を及ぼし、相乗効果となって豊富なバリエーションに加え、完成度の高い作品がたくさんでき上がった。今回のクラスの傾向だったのかもしれない。

動物のバリエーションが少なかったことの原因の一つには、基本形製作の時間短縮を優先して、Aクラスの学生は馬型を、Bクラスの学生はライオン型に限定して説明し、クラス全員が順序良く切り貼りして製作させたことが関係するのではないかと考える。前回は馬型、ライオン型のどちらかを学生が選択させたが、それによって2通りの組み立て方の説明をしなくてはならず、大幅な作業遅延となった。今回、Aクラスはどちらを向いても馬型ばかり、Bクラスはライオン型ばかりということになり、違う型を作っている人から刺激を受け、新たな発想へと向かう展開が持てなかったのではないかと考える。

また今回の課題に限らず、全体的な近年の傾向として、同じような作品が多くなったと感じる。友達が作っている色、形、素材をそのまま模倣したような作品である。中には、コピーしたようにそっくりな作品を作る学生も出て来ている。授業中に個性について説明し、他の人がやっていないことに挑戦することを良しとすることをしばしば発言しているのだが、安易に模倣してしまう。友達と同じようにすることで安心でき、同じことをやっていけば大丈夫だと思うのだろうか。創造することを楽しまずに完成だけを目的としているように思える。

他の傾向として、アートには正解がないはずなのに、学生から正しい答えを求めて来る質問が多くなったと感じる。例を挙げると、自由に色を塗ってよい課題で、「ここは、何色を塗ったらいいのですか」とか、「可愛い色って何色ですか」という質問をされたことがある。また、「次はどうすればよいですか」「これをくつつけるには、どうすればよいですか」とい

うような質問もある。それらの質問に対して「自分で感じたこと、考えたことをまずやってみなさい」と学生に言う頻度が多くなった。著者から学生に対して「なぜそういう質問をしてくるのか」と質問を返すと、必ずと言っていいほど学生が「失敗したくないから」という返事が返ってくる。

最近では、「背景の色は何色が良いのか」と生成 AI に聞いて、教えられた色を選び、背景のスペースに塗る学生も現れた。これが現代の学生の姿である。

10. おわりに

前回行った「段ボールの被りもの」から、素材を紙袋に変えて展開したことによって、スムーズに授業を進行できたこと、造形体験、素材の特性を知ることについては、評価できたと考える。しかし、学生の創造性や個性、ものづくりへのこだわり等については、どこまで引き出せたかについては疑問が残る。

芸術士派遣事業を展開する特定非営利活動法人アーキペラゴ（2025：37）は次のように述べている。

アートには正解がありません。アートにおける正解という言葉を聞くと「美しいかどうか」や「上手か下手か」という基準が思い浮かびますが、美しいか、美しくないか、上手か、下手かという価値は、見る人や時代によって多様に変化します。一般的な教科書のように「これは○」「これは×」とはっきりとした答えがないからこそ、アートではさまざまな価値観が認められ、自分自身の個性に出会ったり、他者の良さに気づいたりすることができるのです。また、正解がない世界で生まれる多様な視点からは「こっちがダメなら他の方法でやってみよう」というように、行きたい場所へたどり着く方法はひとつではないことを、身をもって経験することができます。^[2]

上記のように正解のない世界で、行きたい場所へ行く方法はいくらでもあることを教えてくれるアート、自分が選択してとにかくやってみる体験を積み重ねることによって、生きる力を与えてくれるアート、そして心を豊かにすることができるアートの力を信じている著者にとって、最近聞きたくない情報を耳にした。それは、近所にある小学校の夏休みの宿題から「工作」が無くなったということである。アートの世界は無駄なことなのだろうか。無駄なことを排除して、便利さばかりを追求する世の中で良いのだろうか。

保育者を目指す学生として、保育者自身が自由で豊かな心や感性を持ち、子どもたちそれぞれの個性を認め、褒めてあげられる保育者になって欲しいと願う。

そのためには、学生自身で何事も自ら感じ、考え、選び、行動でき、いろいろな体験・経験、そして失敗を繰り返し行える教育現場が不可欠である。

ローリス・マラグッツィというイタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育改革をリードした社会心理学者・教育哲学者は、以下の「子どもたちの 100 の言葉」という文章を残して

ある。

[……] 子どもには百とおりのある [……] 子どもには 百のことばがある けれど九十九は奪われる 学校や文化が頭とからだをバラバラにする そして子どもにいう 手を使わずに考えなさい 頭を使わずにやりなさい [……] ^[3]

ローリス・マラグッツィが言うように、それぞれの子どもには豊かな才能があり、100の言葉があるけれど、幼児期からの教育課程を経て大人に成長していく中で、独創性や創造性が無くなり、どんどん個性が失われていく姿が、この現代の日本の教育現場でも見て取れる。これが悲しい現実なのである。

前述の「2.「子どもと造形表現Ⅱ」について」のとおり、授業課題は、保育現場で直接実践できるような本能の赴くまま感覚的に仕上げていく活動と、短期大学生として段取りを踏まえて計画的にコツコツと心を込め、こだわりを持って積み上げていくような課題の2方向で展開している。今後、授業展開を進めるにあたり、創造的活動を効果的に取り入れ、造形を通して保育者を目指す学生自身が、豊かで自由な発想で表現できる創造教育を進めていかななくてはならないと考える。そして、各々の多様な感性や考えを引き出し創造することを楽しめる授業を進めていく必要がある。この「被りもの」課題については、もっと豊かな発想でいろいろな形を生み出せる仕掛けを検討していきたい。

引用文献

- 〔1〕 富田昌平（2022）「幼児期における憧れのテレビキャラクターになりたいという願いと実在性の認識」、三重大学教育学部研究紀要、74、p.90
- 〔2〕 特定非営利活動法人アーキペラゴ（2025）『可能性の芸術士』、p.37、ミネルヴァ書房
- 〔3〕 REGGIO EMILIA APPROACH® <https://www.reggiochildren.it/en/reggio-emilia-approach/100-linguaggi-en/> 閲覧日 2025-09-13

参考文献

- 大村 牧（2021）『子どもと作る行事の製作あそび』、pp.60-61、世界文化社
- Canon かぶりもの（ウマ）アーティスト：チャッピー岡本
<https://creativepark.canon/jp/contents/CNT-0019399/index.html> 閲覧日 2025-07-25
- Canon かぶりもの（ライオン）アーティスト：チャッピー岡本
<https://creativepark.canon/jp/contents/CNT-0021024/index.html> 閲覧日 2025-07-25